

鳥取城糀蔵跡(第20次調査)から出土した土器・陶磁器について -中世後期から近世にかけての分類と編年案-

八 峰 興

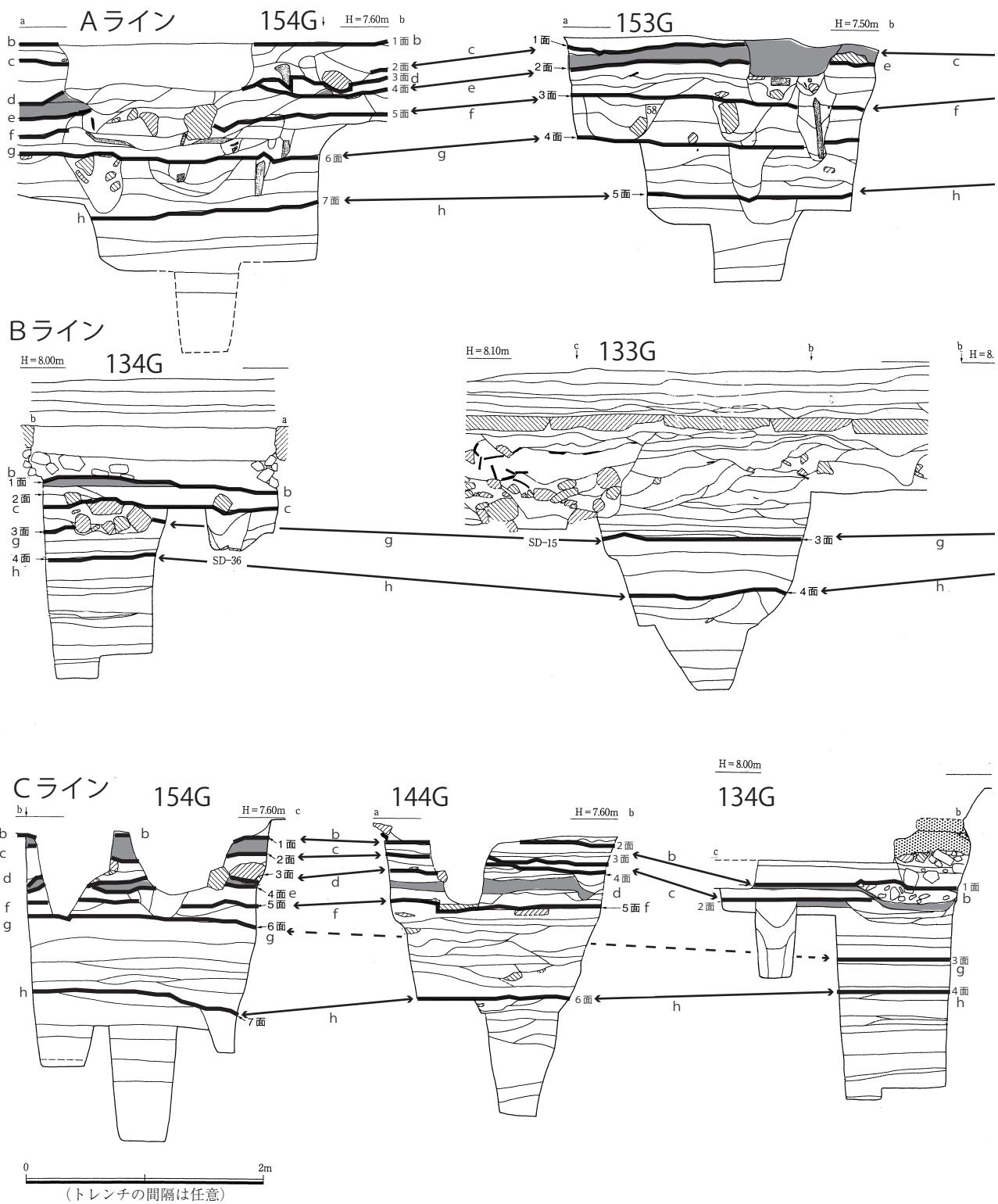
1 はじめにー共通構面の設定について

鳥取城糀蔵跡の現地調査はすでに終了し、報告も刊行された(財団法人 鳥取市文化財団2011)。この調査では糀蔵跡のほか、複数のトレンチ調査を行い、併せてその成果も報告がなされている。そこでこの成果を活用し、鳥取城糀蔵跡における土器及び陶磁器類を分類し、編年案を作成することにした。

第1・2図は報告書掲載の土層図をトレンチ調査位置に対応させたものである。とくに東西ラインをみると、調査地の西側に向かい緩やかに傾斜したこと、その上に中世末から近世にかけて黒褐色系や褐色系の土または真砂を盛土し、平坦面を形成して屋敷地としている。

第1表 鳥取城編年対応表

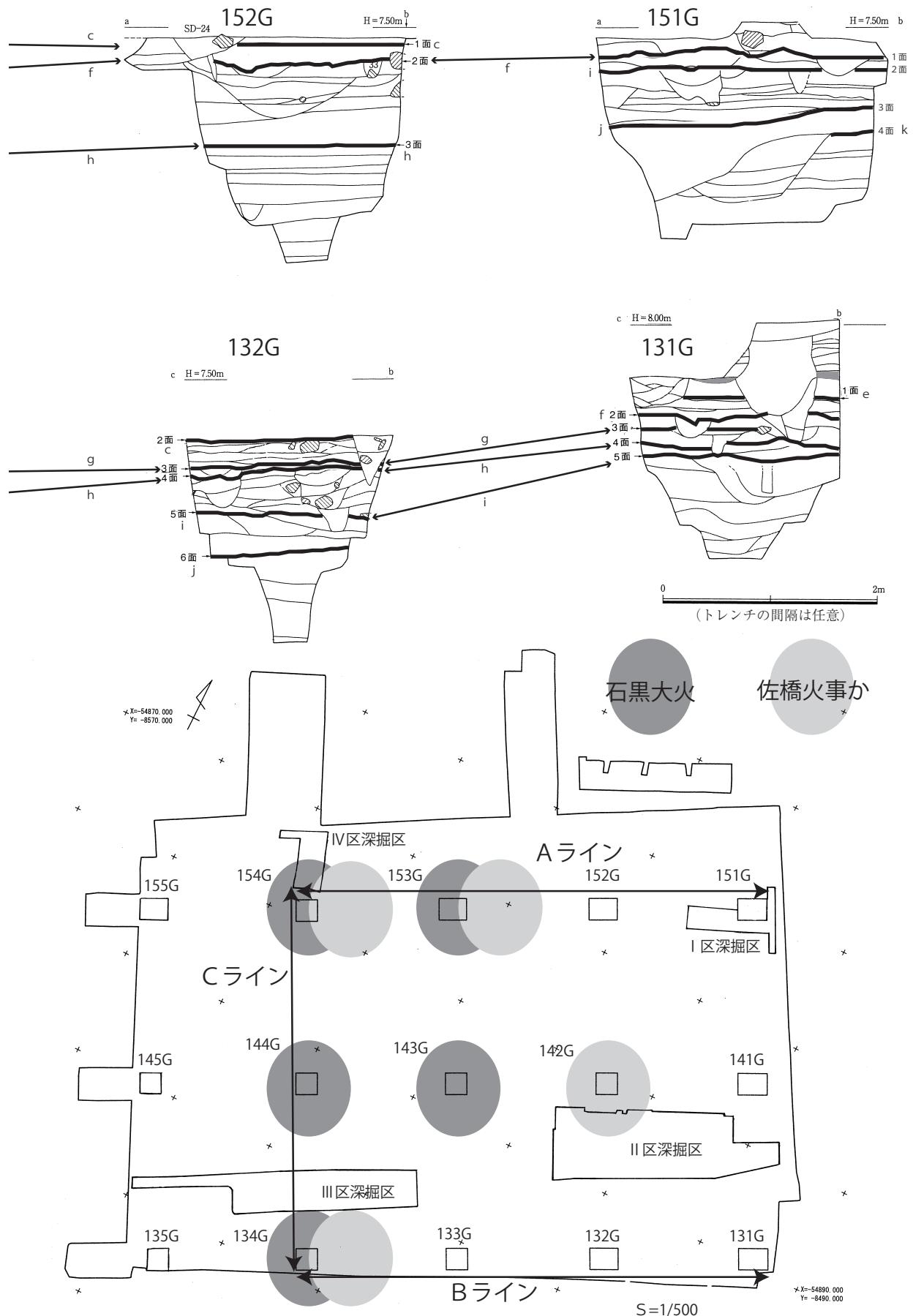
元号	西暦	面	期	土器・陶磁器の特徴	文献
明治 12 頃	1879	a面	鳥取城 V b 期	肥前(系)染付、瀬戸焼、因久山焼、浜坂焼、浦富焼、日下部窯	鳥取城が破却される
明治 2	1869				鳥取城から政庁の機能が移転される
万延元	1860				三の丸の曲輪が拡張される。この工事に伴い、「火除地」にあった糀御蔵の一部が、撤去または移築される
安政 5	1858	b面	鳥取城 V a 期	肥前(系)染付、瀬戸焼、越前甕・擂鉢、石見焼、布志名焼	「糀蔵」の表記が絵図資料に初出
天保 10	1839				「明地」の糀蔵の存在が藩政資料に初出
天保年間	1830～1843				空地のままおかれる
文化 9	1812	佐橋火事。西館の上屋敷御殿は延焼を免れたが、鳥取城の防火のため、火災後に撤去され、跡地は空地とされる			
寛政年間	1789～1800	c面	鳥取城 IV b 期	肥前(系)染付、広東碗、関西陶器、越前甕・擂鉢、瀬戸焼、関西擂鉢、備前、清染付	大きな変化はない
寛延年間	1748～1750	d面	鳥取城 IV a 期	肥前(系)染付、越前甕・擂鉢、関西擂鉢	調査地の区画は大1・小3の4区画となる(大きい区画が西館池田家の上屋敷と考えられる)
享保 17	1732				西館の長屋から出火し、隣接する「会所」が半焼
享保 5	1720	石黒大火。鳥取城と城下町の大半が焼失。「松竹御殿」も焼失。のち、同所に西館の上屋敷が再建され、文化年間まで存続			
享保 3	1718	e面	鳥取城 III c 期	肥前染付、二彩手、刷毛目、京焼風陶器、関西擂鉢	藩主が鳥取城に戻り、「松竹御殿」は再び西館の上屋敷として敬称される
正徳 6	1716				鳥取城の大改修に際し、調査地にあった西館の上屋敷を本藩の藩主が借りあげ、改修して居館(「松竹御殿」)とする
元禄 16	1703				調査地の一部に、鳥取藩主の分知家・西館池田家の上屋敷が創設される
延宝～元禄頃	1670～1703	f面	鳥取城 III b 期	肥前染付、波佐見、二彩手、須佐唐津、関西擂鉢	武家屋敷の区画が9に減少する
慶安 3	1650				鳥取東照宮が勧請される。このころ、調査地周辺は11区画の拝領屋敷で占められていた
寛永 9	1632		鳥取城 III a 期	漳州窯、絵唐津、胎土目唐津、備前、手づくりね土師器皿、糸切土師器皿	池田光仲が鳥取城主となる(鳥取池田家の成立)
元和 5	1619	g面	鳥取城 II 期	漳州窯、絵唐津、砂目唐津、備前、京都系土師器皿	池田光政による鳥取城及び城下町の造営が開始される。調査地周辺が初めて絵図に現れる
元和 3	1617				池田光政が鳥取城主となる
慶長 5	1600				池田長吉が鳥取城主となる
天正 10	1582				宮部継潤が鳥取城主となる
天正 8～9	1580～81	h面	鳥取城 I b 期	京都系土師器皿、白磁、青磁、青花、天目、備前、瀬戸美濃	鳥取城攻め
天正元	1573				山名豊国が布施天神山城から久松山鳥取城に拠点を移す
天文 14	1545	i面	鳥取城 I a 期	京都系土師器皿、白磁、青磁、天目	久松山に出城が築かれる
南北朝～室町	1333～	j面	中世 IV～V 期	土師質土器、瓦質土器、白磁、青磁	「水道谷」一帯に「沢市場」と呼ばれる集落が形成される
鎌倉	1192～				土師質土器、勝間田、瓦質土器
平安	～1191				土師質土器
弥生～古墳		k面		弥生土器、土師器、須恵器	



第1図 土層図 (1)

第2表 遺構対応表

G	対応面																					
131	1面 e	132	1面 b	133	1面 b	134	1面 b	144	1面 a	151	1面 f	152	1面 c	153	1面 c	1面 b						
	2面 f		2面 c		2面 c		2面 b		2面 b		2面 i		2面 f		2面 e	2面 c						
	3面 g		3面 g		3面 g		3面 g		3面 c		3面 j		3面 h		3面 f	3面 d						
	4面 h		4面 h		4面 h		4面 h		4面 d		4面 k		4面 g		4面 e	5面 f						
	5面 i		5面 i		6面 j		6面 h		5面 f		6面 h		5面 h		6面 g	7面 h						



第2図 土層図（2）ほか

堆積層は、特に中世末から近世初頭にかけて厚く、上に2面の焼土層をもち、基本的には盛土を重ねながら堆積している。つまり鳥取城の成立から幕末期まで、層位的かつ面的に良好な状況で遺存しており、この成果を活用すれば鳥取城の編年を作成することが可能となる。報告の段階では各トレンチの遺構面と、層群という大きな解釈に留まり、これより細かな時期設定まではなされていない。

そこで2層の「焼土層」をいわゆる鍵層とし、遺構内出土遺物から各遺構面の時期を比定し、各トレンチの遺構面から、「共通遺構面」を設定し、編年案を作成することにした。報告でも記載されているように2層の焼土層のうち1つは「石黒大火」のため、上層にあたる焼土層を「佐橋火事」と仮定した。

各トレンチで最も遺存状況のよい154グリッドを「モデル」(第1図)とする。a面(鳥取城V b期・以下鳥取城を省略): 粉蔵・幕末期。b面(V a期): 佐橋火事の文化九(1812)年から粉蔵が確認された安政五(1858)年まで。c面(IV b期): 陶磁器類の編年観から18世紀後半から佐橋火事前まで。d面(IV a期): 石黒大火の享保五(1720)年から18世紀前半まで。e面(III c期): 肥前陶磁の編年観から、18世紀初頭から石黒大火まで。f面(III a・b期): 肥前陶磁ほか、貿易陶磁と在地産土師器皿の年代観から、17世紀前半をIII a期、後半をIII b期まで。g面(II期): 肥前産陶器や貿易陶磁、京都系土師器皿の編年から、秀吉により鳥取城が落されて宮部氏の支配から池田光政の治世、概ね16世紀末から17世紀初頭まで。h面(I b期): 以下、京都系土師器皿、貿易陶磁、在地産の土器・陶磁器や国産陶器の年代観から、布施天神山城から拠点が移されたとされる天正元(1573)年からと鳥城が落城するまでの16世紀後葉頃。以下、132グリッドによると、i面(I a期): 久松山に出城が築かれたとされる16世紀中葉頃。j面以下は中世の「沢市場」の集落があるとされる室町以前、平安期まで。k面は古墳から弥生時代とした。

2 編年案

■中世II～III期：平安時代末から鎌倉時代初頭

【在地土器】21は土師質の壺、22・24は須恵器、22は外面に格子状のタタキ、内面カキメの勝間田系の甕、23は瓦質土器の受け口の鍋である。21は131G 4面下の(暗)灰色粘質土、22は132G 5面検出のSK- 78、23は127G 3面検出のP- 127、24は153G 5面下から出土した。

■中世III～IV期：鎌倉時代～南北朝時代

【在地土器】25～27は底面回転糸切りの土師質の小皿、28・29は瓦質の鍋である。25は142G IV層群粗砂中、26は153G IV層群灰黄色砂層、27は144G IV層群⑤灰色砂質土から出土した。28は151G 1面検出のSK- 51のものであるが、下層からの混入と考える。29は131G 5面検出のSK- 79から出土した。

■中世IV～V期：室町時代

【貿易陶磁】1～3は龍泉窯系の青磁で、1は皿、2は碗、3は盤である。1は142G 5面検出のSK- 73、2は152G 2面検出のSD- 27、3はII区層中から出土した。

【在地土器】30・31は土師質の小皿、器壁は薄く、底径は小さい。15世紀の所産。32は土師質の鍋、33は瓦質の羽釜で、いずれも口縁部の退化が著しい。30は154G II層群P 130～132から2層除去後、31は粉蔵面のSK- 19で混入品、32は141G IV層群灰黒粗砂、33は粉蔵面検出のSX- 04から出土した。

■鳥取城 I a期

【貿易陶磁】4～7は景德鎮窯系の白磁、8は景德鎮の染付、12は胎土や外面のケズリの状況などから、中国産の天目碗である。4は142G II～III層群、黒褐色砂質土掘下中、5は132G 3面下10cm程の灰黄褐色粘砂質土中、6は143G III層群③黄灰色粘砂質土検出面からの掘下げ中、7は151G 1面検出のSK- 51、8は131G 2～3面の包含層(褐灰色粘質土)、12は141G 2面検出のP- 148から出土した。

【国産陶磁】9～11・13は瀬戸・美濃陶器。9～11は皿で、9の内面は蓮弁文を模している。13は天目碗である。9は153G III～IV層群黒褐色粘砂質土、10は131G 2～3面の包含層(褐灰色粘質土)、11は133G 4面検出のSK- 81、13は粉蔵面検出のSX- 02から出土した。

【京都系土師器皿】34・35は小型、36～38は中型で器は深く、口縁部はやや外反気味で口縁端部をやや外方向に摘まむ。天神山Ia- 5～6並行期(第3図)。34は153G III層群、35は132G 4面下包含層中、36は144G 6面検出のSD- 34、37は143G III層群黒褐色泥砂混じり粘質土と③の下層の暗灰色粘砂真砂層(灰色粘質層の上まで)

第3表 主要遺構内土器・陶磁器一覧（グリッド深掘内）

【131グリッド】

面	遺構等	出土遺物	時期
	P-100	染付	17C 前半～
	P-138	越前甕・擂鉢、刷毛唐津、染付	18C～
	P-156	中近世土師器	
	SK-55	染付	18C 前半
1	e	P-157 中近世土師器皿	
1		P-158	—
2	f	P-161	—
3		P-164 中近世土師器	
3	g	P-165	—
3		P-166	—
4	h	P-170	—
5		SK-79 中近世土師器、瓦質土器	15～16C
5		P-174	—
5	i	P-175	—
5		P-176	—
5		P-177	—
5		P-178	—

【132グリッド】

1	b	SK-67 肥前染付、唐津、中近世土師器	18C 後半～19C 初
1		P-136	—
1		P-137 肥前陶器皿か	18C～
2	c	P-141 陶器	
2		P-142 土師器皿、瓦質土器	
3	g	SK-69 土師器皿、青磁、白磁、瓦質土器	16末～17初
4		SK-70 土師器皿	16C 後半
4	h	SK-71 土師器皿、青花	16C 後半
4		SK-72	—
5	i	SK-78 勝間田、中世土師器、瓦質土器	14～15C
6	j	SD-35 144G か、土師器	古墳時代～

【133グリッド】

1	b	SK-84 133G か、染付	
1		P-173	—
		SD-38 刷毛唐津、染付	18C
2	c	SX-12 磁器	
2		P-189	—
3		SK-80 中近世土師器	
3	g	P-190	—
3		P-191	—
4		SK-81 瀬戸美濃	16C 後半
4	h	SK-82	—
4		P-192	—

【134グリッド】

1	b	SK-77 染付、唐津、土師器	19C
1		P-168	—
2		SD-36 染付、陶器、土師器	18C
2		SD-37 染付、青磁、二彩手	18C 前半
2		P-179	—
2	c	P-180 肥前染付、土師器	18C～
2		P-181 肥前染付、陶器	18C～
2	c	P-182	—
2		P-183	—
2		P-184	—
2		P-185	—
2		P-186 肥前染付、土師器	18C～
2		P-187	—
		SK-75 染付、備前、刷毛唐津、土師器	18C
3	g	P-193 陶器碗	17C 前半～
4	h	P-194	—
4		P-195	—
4		P-196	—

【144グリッド】

面	遺構等	出土遺物	時期
1	a	P-124	—
		SK-65 肥前染付	18C
2	b	SK-68 131G か、越前	18～19C
2		P-125	—
3	c	SK-74 肥前染付、備前	17～18C
3		P-160 備前	18C～
3		P-162	—
4	d	SD-33	—
4		P-163 二彩手	17C 後半～
6	h	SD-34 土師器皿、備前	16C 後半

【151グリッド】

1		SD-25	—
1	f	SD-29 弥生土器、備前	15～16C
1		SK-51 白磁、瓦質土器	15～16C
2		P-93 須恵器	古墳時代～
		P-120 土師器	古墳時代～
2	i	P-121	—
2		P-122	—
2		P-123	—
2		P-197	—
3	j	SD-26 弥生土器、土師器	古墳時代～
3		P-96 土師器	古墳時代～
3		P-97 土師器	古墳時代～
3		P-98	—

【152グリッド】

1	c	SD-24 肥前染付、唐津、土師器皿	18C～
2	f	SD-27 肥前染付、青磁、唐津、瀬戸美濃、瓦質土器、須恵器、弥生土器	17C
3		P-127 瓦質土器	13C 後半～
3	h	P-128	—
3		P-129	—

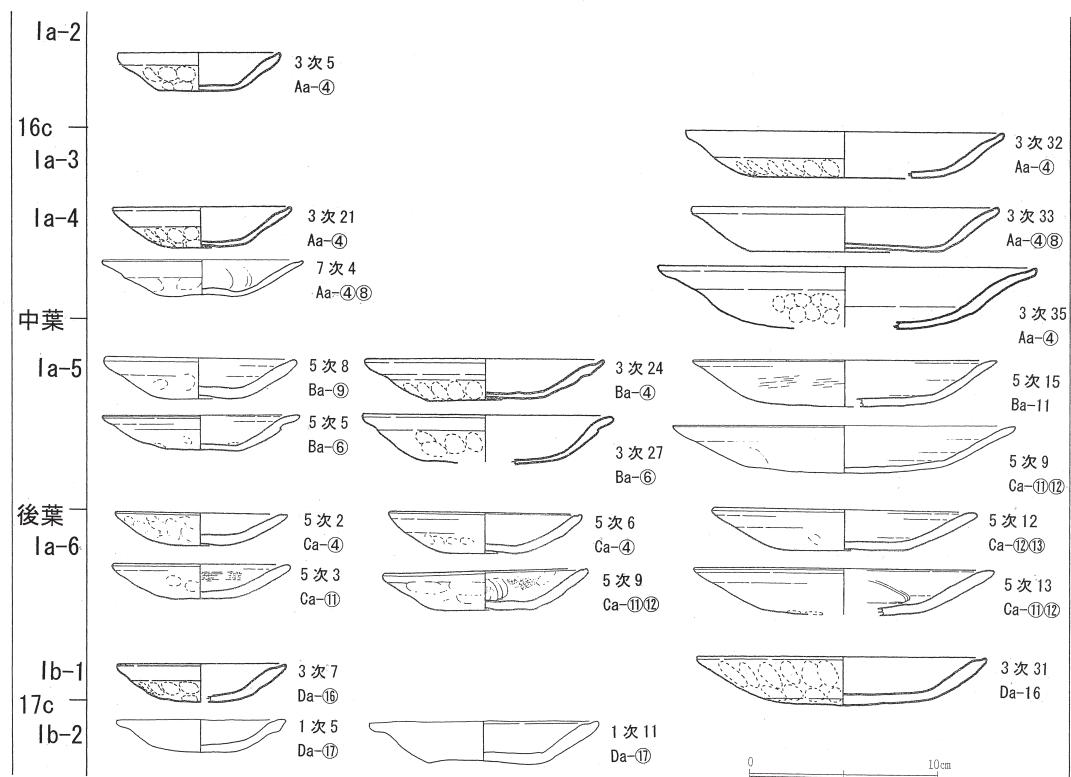
【153グリッド】

1		SK-49 染付、越前、土師器	18～19C
1	c	SK-50 染付、陶器、土師器	18～19C
1		P-80	—
1		P-81 陶器擂鉢	
1.2		SX-16	—
1.2	c	P-101 刷毛唐津、土師器	18C～
1.2		P-102	—
1.2	e	P-103	—
1.2		P-104	—
3	f	P-198	—
4	g	P-199	—
5	h	P-135 土師器、須恵器	古墳時代～

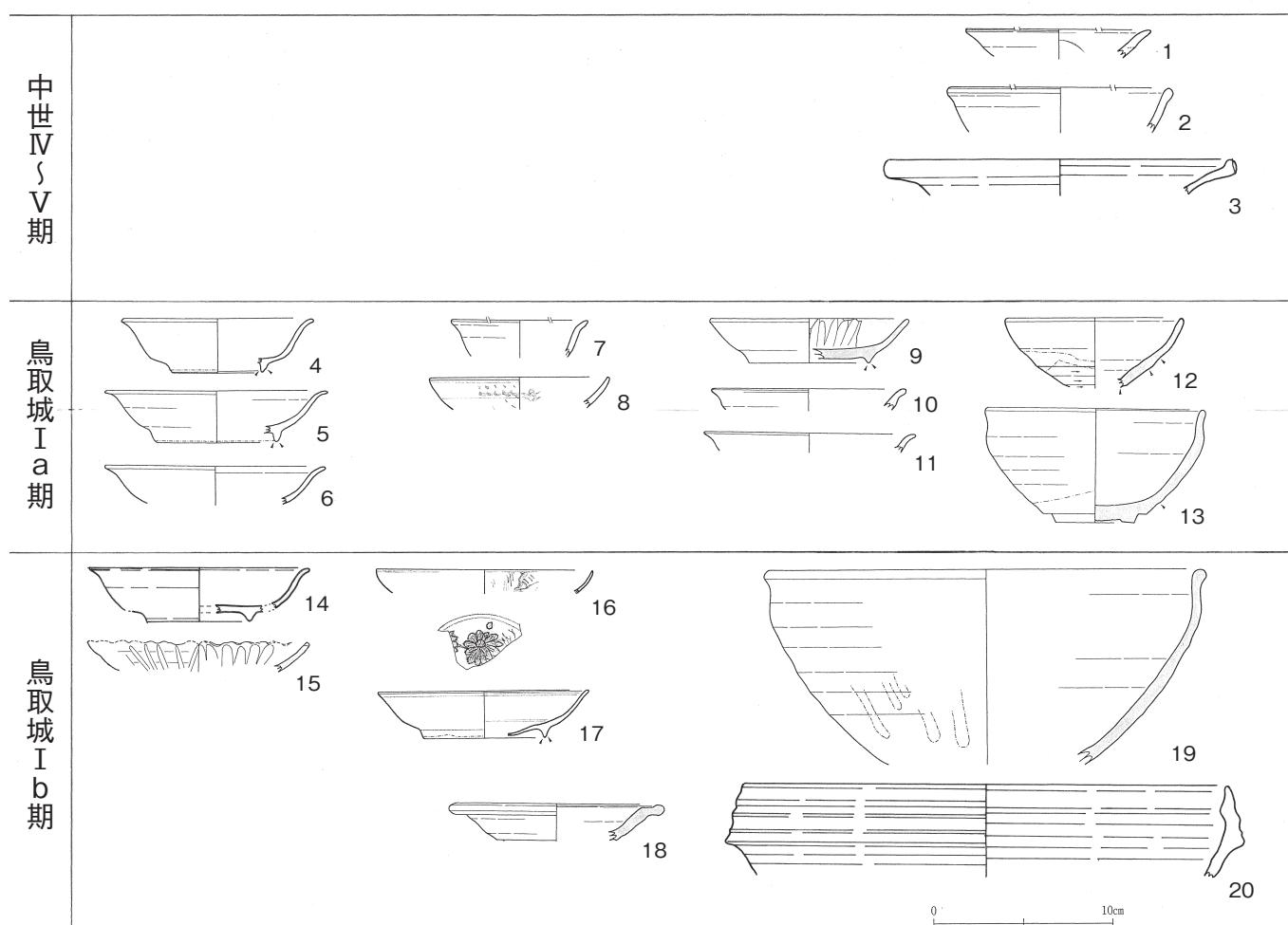
【154グリッド】

1	b	SK-13	—
1		P-117 肥前染付	18C 後半～
2	c	P-126 染付、擂鉢	18C 後半～
2		SD-30 陶器	
4	e	SK-66 越前、陶器	18C
5	f	P-130 勝間田、土師器	16C 後半～
5		P-131 染付	17C 後半～
5		P-132	—
		SD-32 青花、土師器	16C
6		SD-42	—
6	g	P-133	—
6		P-134	—
7	h	SD-43	—

※ 分類の成果は、筆者が実見できた遺物のみ記載した。また遺構内から出土した土器・陶磁器については、該当する時代に遡る遺物も含めた。時期は概ね生産地での年代観、在地土器については筆者の編年（八崎 2004・2011）に拠る。



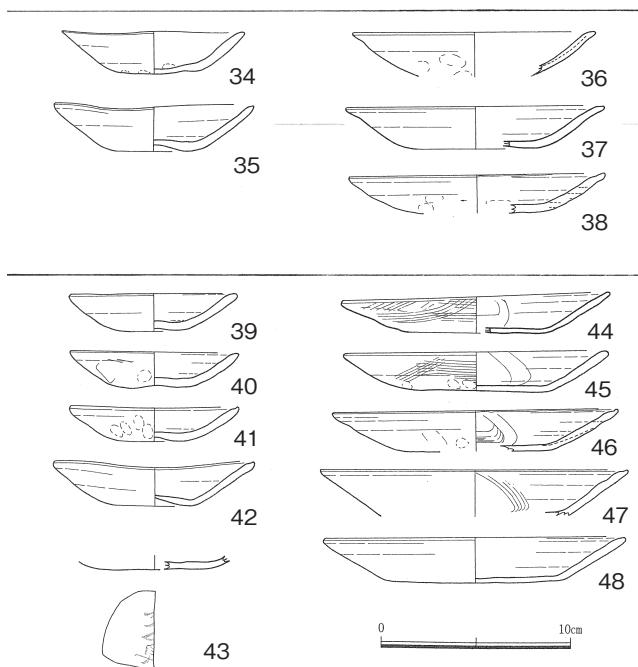
第3図 天神山遺跡から出土した京都系土師器皿の変遷（八峰 2011 から転載）



第4図 鳥取城編年案（1）

中世Ⅲ～Ⅳ期

中世Ⅲ～Ⅳ期



第5図 鳥取城編年案 (2)

から、38は132G IV層群から出土した。

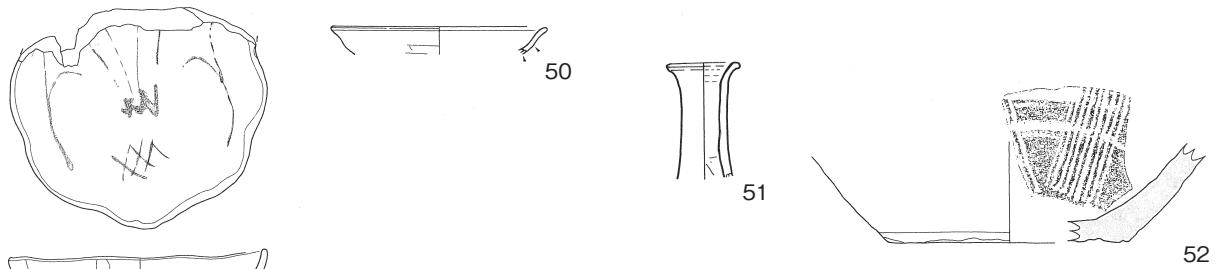
■鳥取城 I b 期

【貿易陶磁】14は中国産白磁、15・19は中国産青磁、16・17は景德鎮の染付である。14は132G 3面検出のSK-69、15は142G II～Ⅲ層群黒褐色粘質土掘下げ中、16は143G Ⅲ層群③黄灰色粘砂質土検出面からの掘下げ中、17はⅢ区IV層群糊蔵面下1.2m、19はⅣ区D 4・D 5G II層群から出土した。

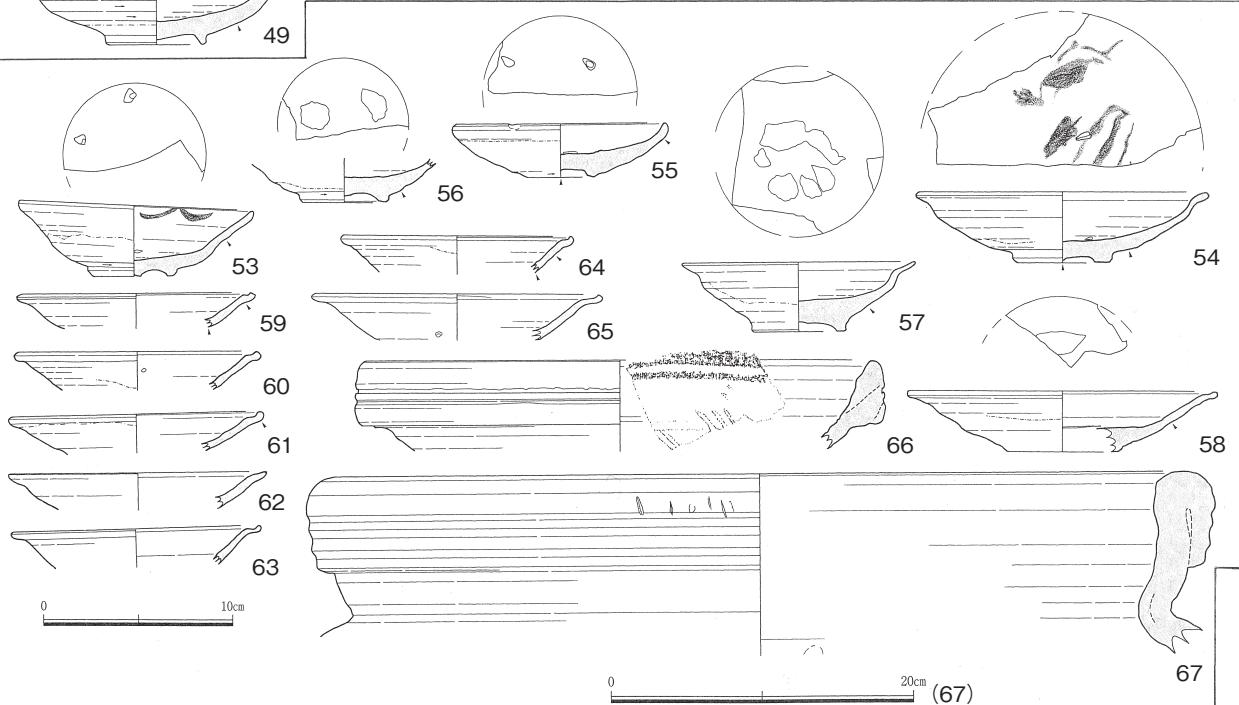
【国産陶磁】18は瀬戸・美濃、20は備前である。18は132G 3面下10cm、20はⅢ区A 6Gから出土した。

【京都系土師器皿】39～42は小型、43～48は中～大型で、口縁部な平坦な底面から直線状に外傾する。天神山Ia-6並行期(第3図)。39・42・44・47は132G 4面検出のSK-71、40・41・48は132G、40・48はⅢ層群、41は4面下包含層中、43は142G Ⅲ層群黒褐色砂質土掘下げ中、45は132G 3面検出のSK-69、46は132G 5面検出のSK-78から出土した。

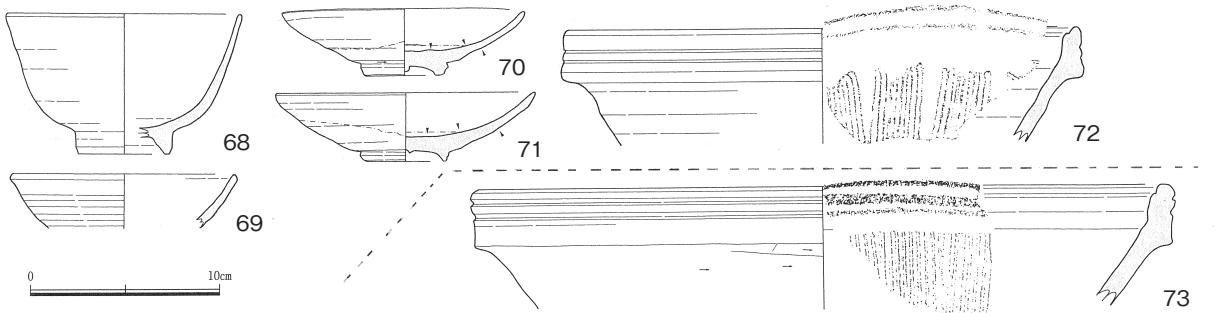
鳥取城Ⅱ期



鳥取城Ⅲa期



鳥取城Ⅲb期



第6図 鳥取城編年案（3）

■鳥取城Ⅱ期

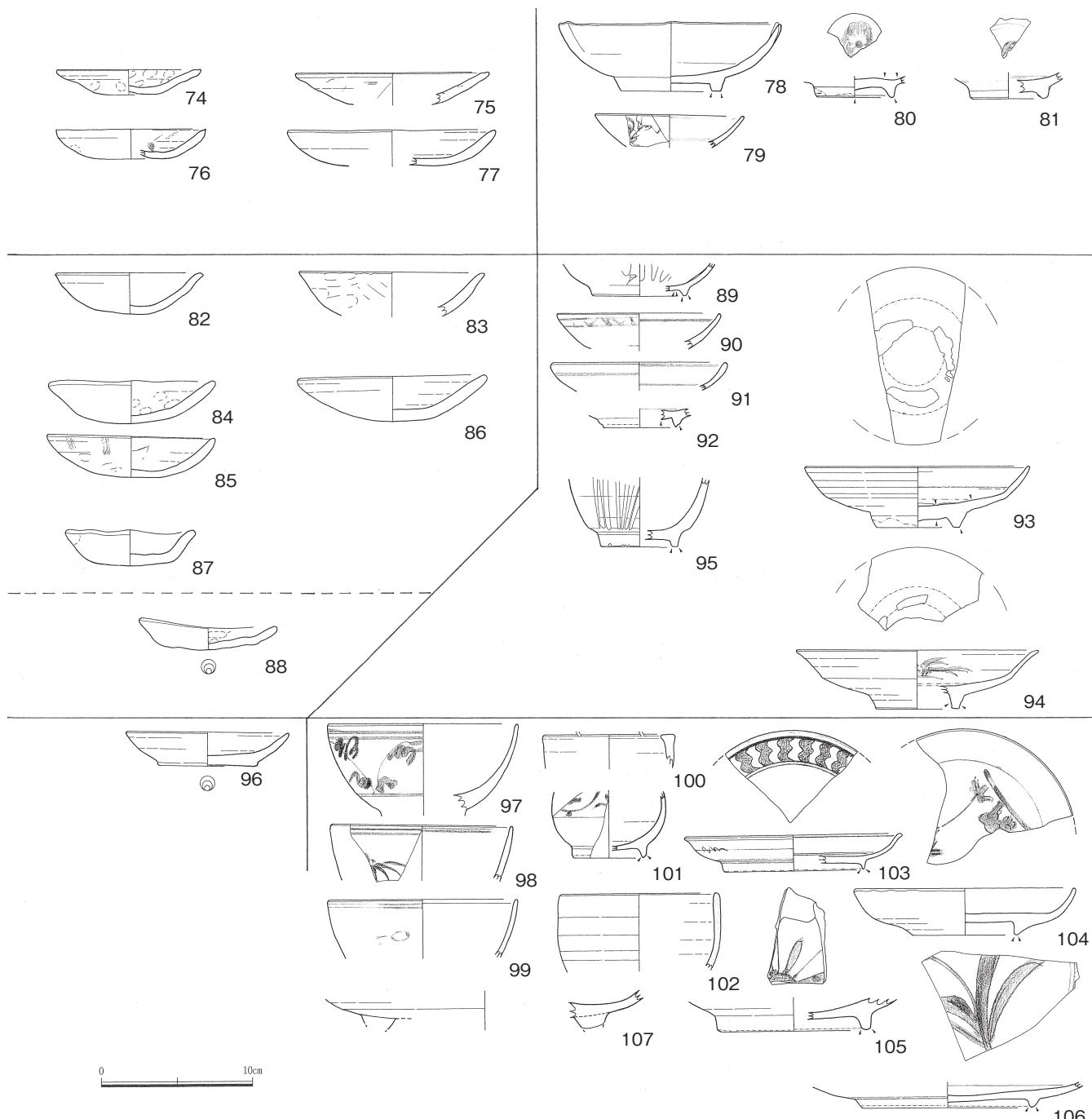
【国産陶器】49・50は肥前陶器で、49は焼成不良の芙蓉手の絵唐津。焼成不良の素地に白色の釉。50は碗または皿であろう。51・52は備前で、51は鶴頸徳利、52は擂鉢である。49はⅡ区Ⅲ層群、50は132G 4面検出のSK-70、51はⅡ区A 2G、52は132G 3面下黒褐色粘質土から出土した。

【京都系土師器皿】74・76は小型、75・77は中型である。74・75の体部は外傾し端部の断面は菱形状を呈し、天神山城Ib-1並行期（第3図）。76・77は口縁部が内湾する浅い器形である。74は132G 3面検出のSK-69、75は142G 3面上、76は132G 4面検出のSK-70、77は143G Ⅲ層群黄灰色粘砂質土除去時に出土した。

【貿易陶磁】78は中国南方の輪花の青磁、79～81は染付で、80・81はソフトウと称される福建省漳洲窯の所産である。78は151G Ⅱ層群、79は144G Ⅲ層群灰黄色砂下の黒褐色砂質土、80は152G 3面上、81は142G Ⅱ～Ⅲ層群黒褐色砂質土掘下げ中に出土した。

■鳥取城Ⅲa期

【国産陶器】53～65は唐津で、53・54は絵唐津、59～65は溝縁皿で、55は胎土目積、53・56・57は砂目積で



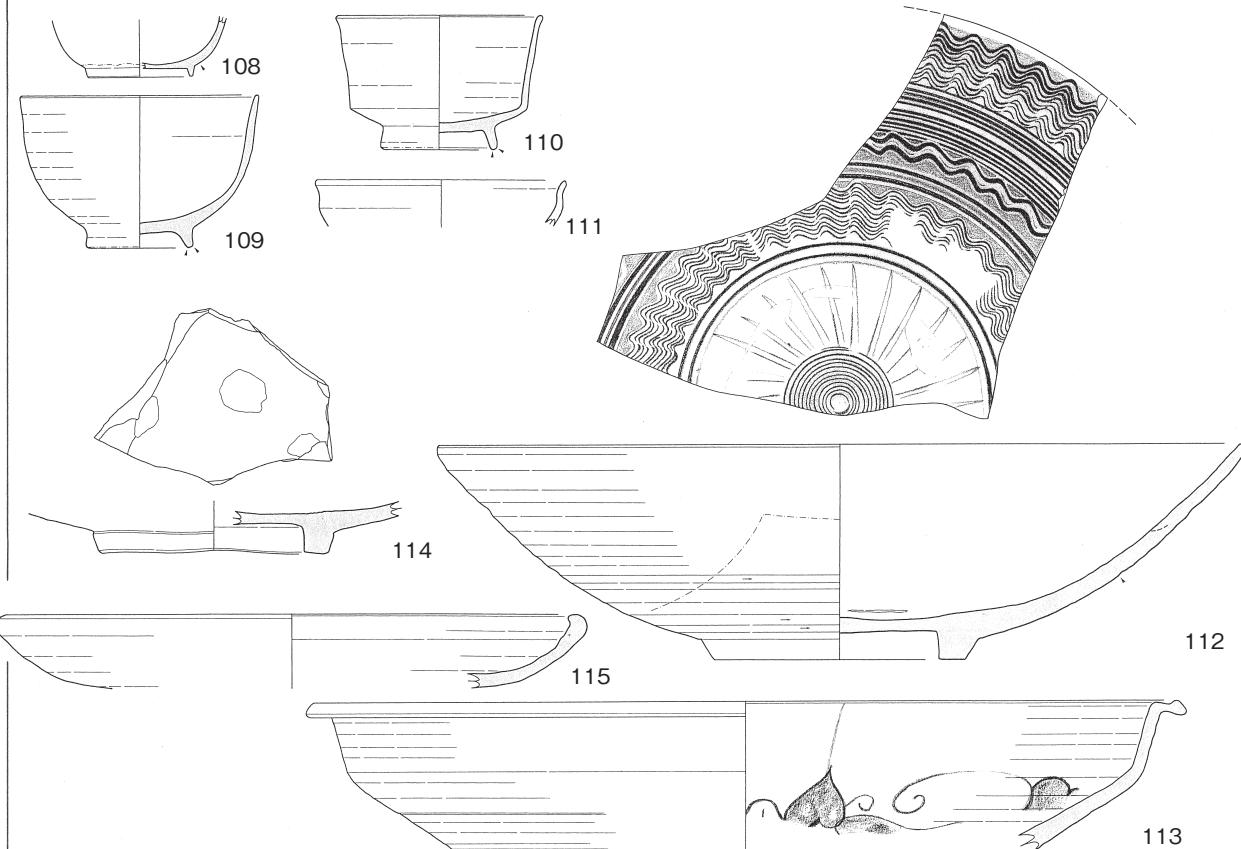
第7図 鳥取城縦年案 (4)

ある。67は備前で、66は備前とは胎土も焼きも異なるため別地域の所産か。53はII区A 1GⅢ層群、57はII区A 2GⅢ層群の上層焼土面までの掘下げ中に、54は143GⅢ層群黄灰色粘砂質土除去時、63は144G 5面上、55は141G 1面掘下げ中に、58は141G 1～2面掘下げ中に、56は142GⅡ層群黄橙色砂除去面(下に灰色砂)、59は134G 2面上、60は154GのP 130～132から2層除去面、61はⅢ区Ⅲ層群第212層、62は144GⅢ層群灰黄色砂下の黒褐色砂質土、64は132G 3面下黒褐色粘質土、65は153GⅢ層群第42層上遺構面から掘下げ中に、66は154GⅡ層群P 130～132検出面上、67は糞藏面検出のSD-04から出土した。

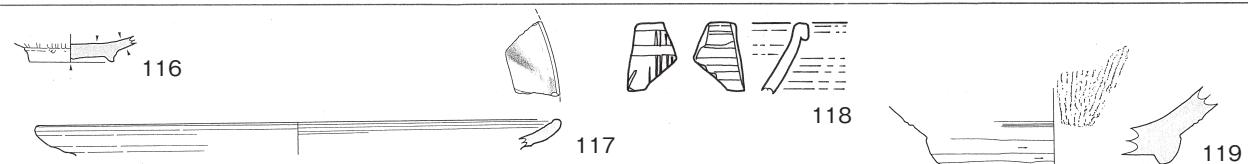
【在地土器】82～87は手づくね成形である以外は京都の影響は認め難い。時期が下るため天神山城期に並行するものは認められない。法量は單一で碗状を呈し底部は小さい。87は厚く口縁端部のみ外反する。82は153GⅢ層群暗灰色粘質土除去面(黄灰色粗砂質土上面)、83は134G 3～4面間、84は153GⅢ層群、85・86はII区A 1GⅢ層群、87は144G 5面上、88はI区区画2と3の間、灰色土層上面から出土した。

【貿易陶磁】89～92はいずれも漳洲窯で、89は青磁、90～92は染付である。89は144GⅢ層群灰黄色砂下の黒褐色砂質土、90は131G 2～3面の包含層(褐灰色粘質土)、91は132G 3面下10cm、92は152G 2面検出の

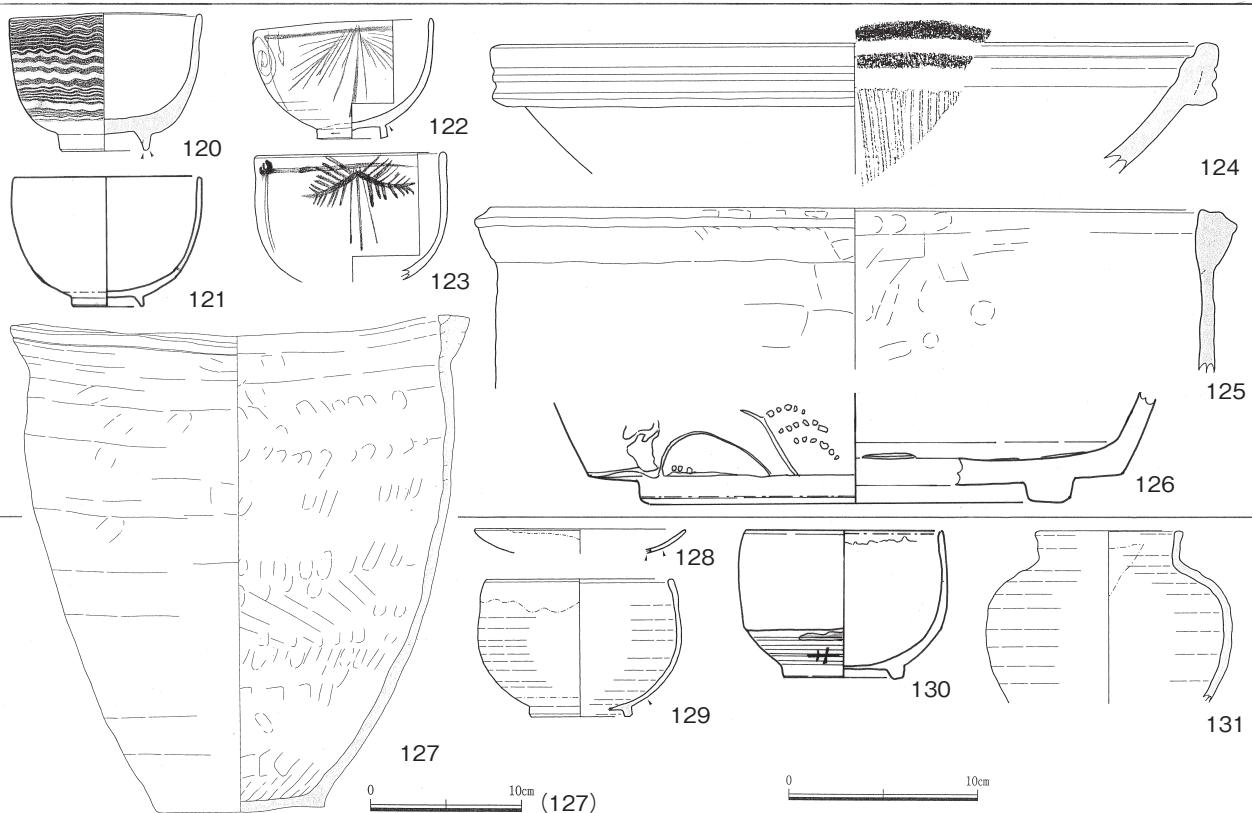
鳥取城III C期



IV 鳥
a 取城
期



鳥取城IV b期



第8図 鳥取城編年案 (5)

SD- 27から出土した。

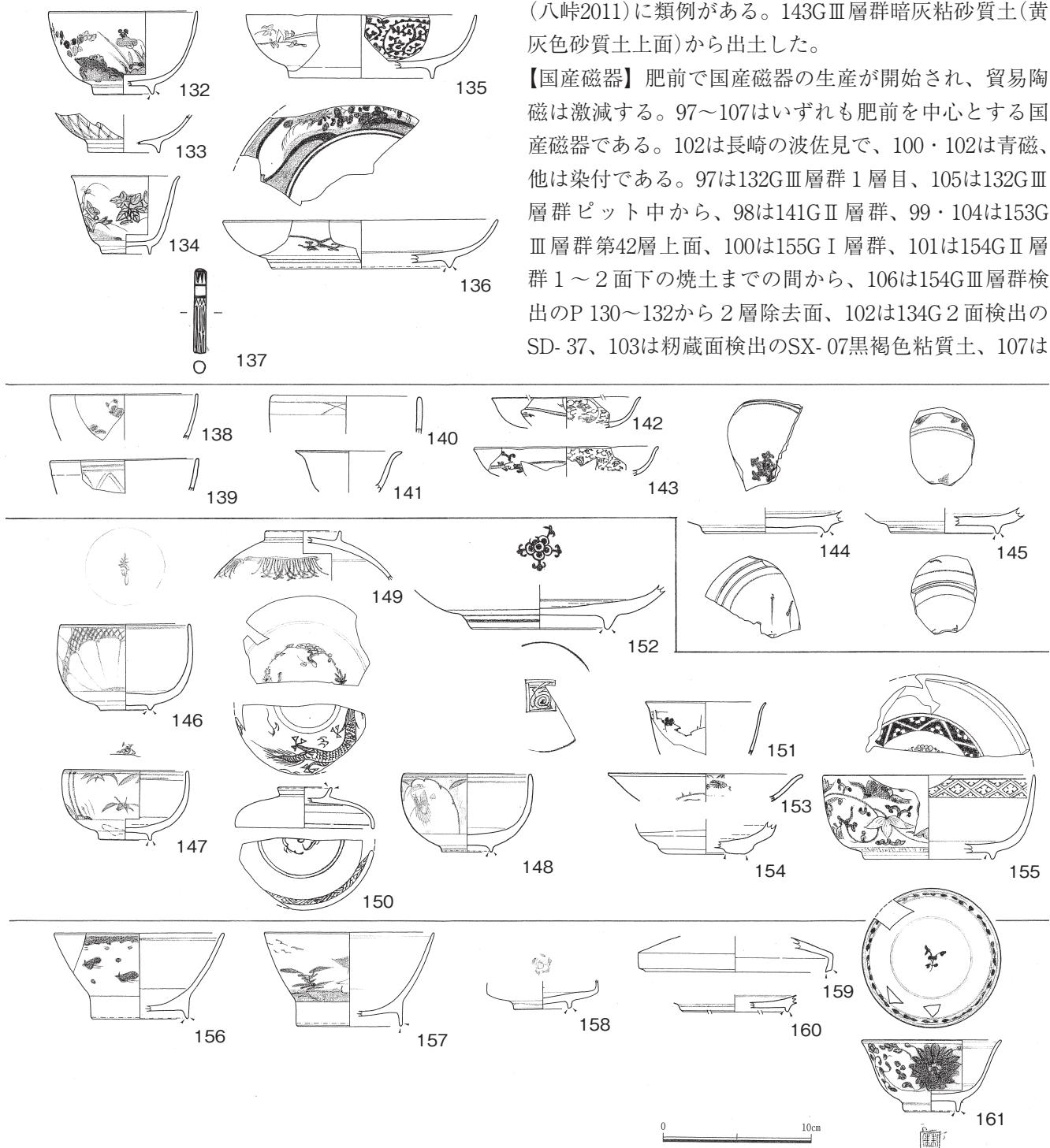
【国産磁器】93～95は肥前で磁器の生産が開始された頃のものである。いずれも染付で、93・94は蛇の目釉剥ぎの後に砂目の重ね焼き。胎土目のものよりは時期的に下る。93はⅢ区Ⅲ層群、94はⅡ区A1GⅢ層群黄褐色土(鉄分多)灰黄砂質土上層、95は131GⅢ層群検出のP- 100から出土した。

■鳥取城Ⅲ b 期

【国産陶器】68・70・71は肥前で、69は北部九州か。72は備前または備前系。73は関西系の擂鉢で、詳細はⅢC期で述べる。68はⅡ区A 1GⅢ層群、69は134G 3面のP- 193検出面上、70・71はⅢ区Ⅲ層群166層、72は143GⅡ層群暗灰粘砂質(黄灰色砂質土上面)から出土した。

【在地土器】96は浅い逆台形状で底面回転糸切り。同時期では鳥取城三の丸と倉吉市山名氏館跡推定地遺跡(八峰2011)に類例がある。143GⅢ層群暗灰粘砂質土(黄灰色砂質土上面)から出土した。

【国産磁器】肥前で国産磁器の生産が開始され、貿易陶磁は激減する。97～107はいずれも肥前を中心とする国産磁器である。102は長崎の波佐見で、100・102は青磁、他は染付である。97は132GⅢ層群1層目、105は132GⅢ層群ピット中から、98は141GⅡ層群、99・104は153GⅢ層群第42層上面、100は155GⅠ層群、101は154GⅡ層群1～2面下の焼土までの間から、106は154GⅢ層群検出のP 130～132から2層除去面、102は134G 2面検出のSD- 37、103は糀藏面検出のSX- 07黒褐色粘質土、107は



第9図 鳥取城編年案 (6)

143GⅢ層群暗灰粘砂質土(黄灰色砂質土上面)から出土した。

■鳥取城Ⅲ c 期

【国産陶器】111は瀬戸・美濃の天目であるが、108~110・112~114はいずれも肥前で、108は呉須絵、109は呉須平の碗。112は刷毛目、113・114は二彩手の大皿である。115は北部九州産か。73は焼きも堅牢で内面口縁端部下に凹線状の窪みが入る堺などの関西系擂鉢で、備前に下る。108はⅡ区Ⅱ層群2層目から、109は153GⅡ層群42層上面、110は153GⅡ層群21層、111は154GⅢ層群③④層、粗砂層直上層、112はⅢ区Ⅲ層群、113はⅢ区Ⅲ層群砂混じり黄褐色砂質土中から出土した。114は糀藏面検出のSX-07のものであるが、時期的には遡るか。115はⅡ区A 1GⅡ層群中から、73は155G 2面検出のSD-28から出土した。

【国産磁器】132~137は肥前染付で、134はコンニャク印版である。焼土層出土で二次焼成を受ける。135は片打成形で二次焼成が顕著。137は筆管で、図化していないがコンニャク印版に筆書きを加えたもの、蛸唐草文の小丸碗など肥前製品の中でも上手のもの、二次焼成を受けたものが目立つ。132はⅡ区A 1GⅡ層群上層焼土面対応層検出面までの間から、133はⅣ区D 4・D 5GⅡ層群、134は153GⅡ層群焼土層、135はⅣ区D 4・D 5GⅡ層群中、136はⅣ区D 4・D 5GⅡ層群、137はⅣ区D 5GのP-17から出土した。

■鳥取城Ⅳ a 期

【国産陶器】117は肥前で、116は嬉野、118・119は須佐である。116は140GⅡ層群面、117は144G 4面検出のP-163、118は155Gの瓦溜り①、119は155G 1面下約15cmから出土した。

【国産磁器】140のみ波佐見の陶胎染付で、144・145はコンニャク印版である。138は133G 1面検出のSK-84、139は133G 2面上、140は144G 1~2遺構検出面上、141は141G 1面掘下げ中、142はⅢ区A 6GⅡ層群110層中、143はⅢ区Ⅱ層群、144は131G I~Ⅱ層群検出のSK-55、145は134G 2面検出のSD-36から出土した。

■鳥取城Ⅳ b 期

【国産陶器】120は肥前の刷毛目碗で、121・126は瀬戸村で121は薄手の丸碗、126は水甕、122・123は関西系のしめ縄文の碗、124は堺擂鉢、125は越前甕である。肥前産は減少し、関西や東海、越前などの搬入が増加する。120はⅢ区A 4G下層焼土面検出時か。121はⅢ区、122は糀藏面検出のSD-15、123は糀藏面検出のSD-04、124はⅣ区のSK-35、126はⅣ区、125は141G 1面検出のSK-54から出土した。

【国産磁器】肥前のほか、147・148のような肥前系もある。146は134G 1面上、147はⅡ区A 2G 1面下から上層焼土層までの間から、155はⅡ区Ⅱ層群7.3m以下上層焼土面までの掘下げ中、148は143G I層群竈燃焼部底面、149は糀藏面検出のSX-07、150はⅣ区I層群検出のP-33、151は144G 3面検出のSK-74、152は153G 1面検出のSK-49、153は132G 1面検出のSK-67、154は134G 2面検出のSD-36から出土した。

■鳥取城Ⅴ a 期 ■鳥取城Ⅴ b 期

【国産陶器】127は越前甕、128は備前の灯明皿、129は石見の碗である。130は布志名の碗で、高台内や外面上の露胎部に墨痕がある。布志名の碗は複数出土しているが、いずれも所有者名の墨書を記す。131は越前の小型壺。石見・出雲産の陶器が加わる。127は153G 1面検出のSK-49、128は144G 3面検出のP-160、129は糀藏面検出のSX-07底面上、130はⅣ区炭層上面から出土した。131はⅣ区Ⅱ層群下層焼土面下のものか。

【国産磁器】156・157の肥前もしくは肥前系の広東碗や、158の肥前とみられる筒碗、159の蛸唐草文の蓋、160の皿がある。156はⅡ区I層群A 1G 1面下から、157はⅣ区I層群、158は糀藏面検出のSD-15、159は143G I層群暗灰粘砂質土(糀藏検出面からの掘下げ)、160は152G 2面検出のSD-27から出土した。

【貿易陶磁】161は清朝のコバルト釉の染付。嗜好品とみられる。糀藏面検出のSD-19から出土した。

3 土器及び陶磁器の傾向

【中世Ⅱ~V期】平安時代末から鎌倉時代に、土師質土器の壺や小皿、勝間田系須恵器が、室町期にかけて土師質土器の皿や瓦質土器の鍋・羽釜、青磁などが出土する。

【鳥取城I期】I a期、16世紀中葉頃から京都系土師器皿や白磁や青磁、天目などの貿易陶磁、備前・瀬戸・美濃製品が出土し、城としての機能が開始されたと考える。I b期には急激に土器・陶磁器が増加し、この頃に天神山城から主要な機能が移転したと理解したい。京都系土師器皿の一括廃棄土坑のほか、貿易陶磁の白磁や青磁、景德鎮の染付が出土する。国産陶器には備前の擂鉢や瀬戸・美濃の碗皿類がみられる。

【鳥取城Ⅱ期】概ね宮部継潤から池田光政頃。京都系土師器皿のほか、唐津の皿や絵唐津、備前が出土する。貿易陶磁では、中国南方産の青磁や、漳州窯の染付も出土する。

【鳥取城Ⅲ期】池田光仲から石黒大火までの間で、Ⅲa期は唐津の溝皿や絵唐津と備前が出土する。貿易陶磁も出土するが肥前では磁器生産が開始され、搬入される。Ⅲb期からは肥前の陶磁器が主体となり、波佐見も若干出土する。Ⅲc期にかけて擂鉢は備前から堺・明石など関西系に主体が移る。この時期は刷毛目や二彩手の大皿や印判手、型打成形、筆管などの肥前製品の中でも比較的上手の品が目立ち、流通品である波佐見の陶胎染付は僅かに留まる。また二次焼成を受けた優品も多く、石黒大火に加え、西館池田家や松竹御殿などが移されたという遺跡の性格と関係があるのかもしれない。

【鳥取城Ⅳ期】石黒大火と佐橋火事との間で、Ⅳa期は、陶器は肥前のほか、嬉野の皿、須佐の擂鉢など。肥前の染付は多いものの大物は少なく小中型品が中心となる。Ⅳb期は陶器では肥前の刷毛目碗、関西系陶器碗、瀬戸村の碗がある。擂鉢は関西系、浅鉢は瀬戸村、甕は越前と搬入経路の多様性がみられる。磁器は肥前の丸碗が中心ではあるが、いわゆる肥前系と呼称される肥前とは別地域の染付も定量出土する。

【鳥取城Ⅴ期】佐橋火事以降、火除け地、糀蔵となる。なお、143Gと144Gからは上層の焼土層は確認されておらず、文献に「西館の上屋敷御殿は延焼を免れた」とあり、位置的にみても興味深い。遺物の時期はa期とb期に細分できるものの、全体的に少ないと一括する。Ⅴa期は糀蔵以前で、陶器は備前の灯明皿、越前の壺甕、石見や布志名の碗など周辺地域が多く、磁器も肥前系が主体となる。嗜好品とみられる清朝染付もある。Ⅴb期は在地窯の生産も加わる。

4 まとめと今後の課題

鳥取城糀蔵の調査では幕末期の遺構である糀蔵跡のほか、こうした下層の遺構を確認するためのトレンチ調査も行われたため、中世末から近世にかけての概要が明らかになりつつある。今回のテーマである共通遺構面については、周辺地域の調査でも応用可能であるため、今後とも追・再検討を行い、精度を高めていく必要がある。

今回は糀蔵期以降の陶磁器類は検討していない。幕末期から明治初頭にかけては、肥前、瀬戸、出石の磁器、越前、備前、石見、布志名の陶器などの搬入品のほか、幕末期の在地窯製品として、因久山焼、浜坂焼、牛ノ戸焼、曳田焼、浦富焼、日下部窯などが定量確認できているものの、当該期の研究は開始されたばかりであり、福井焼など伝世品すらないものも含まれると考えられる。幕末期以降の状況については、今後の研究の進展を待ち、あらためて報告したい。

また遺物の年代観について、近世の陶磁器類については特に齟齬は認められないものの、京都系土師器皿の編年観は報告書と大きな隔たりが生じた。今回は前の守護所である天神山遺跡との連続性と遺構検出面及び出土陶磁器の年代観を加味して判断したが、この点についても今後検討していく必要があるだろう。

今後は、出土品の詳細な分類とカウントと層位的な調査の成果と併せ、城下に加えて周辺集落との要相とも比較し、遺構のみならず遺物からも鳥取城の総合的な復元を望みたい。

5 おわりに

今回の報告は、鳥取城糀蔵跡の発掘調査中から今年度までの間、断続的にではあるが遺物を検討させていただいた成果を総括したものである。今後さらに精度を高めるため、ご指導いただければ幸いである。

なお陶磁器類の年代観については、陶磁器全体の分類も含め、元九州陶磁文化館の大橋康二氏にご指導いただいた。また、貿易陶磁器全般・堺擂鉢について堺博物館の續伸一郎氏、瀬戸・美濃製品は愛知学院大学の藤澤良祐氏、越前は福井県教育庁埋蔵文化財調査センターの木村孝一郎氏、明石擂鉢は明石市教育委員会の稻原昭嘉氏、岡山市教育委員会の備前は乗岡実氏、須佐は益田市教育委員会の佐伯昌俊氏、出石は兵庫県立考古博物館の岡田章一氏、兵庫県立歴史博物館の鈴木敬二氏、豊岡市教育委員会の潮崎誠氏、石見は島根県教育庁埋蔵文化財調査センターの東森晋氏にご教示いただき、その成果を反映した。

最後になりましたが発掘調査時からこれまで、遺物の検討にご協力いただいた鳥取市教育委員会、財団法人鳥取市文化財団埋蔵文化財センターの皆様方にお礼申し上げます。

【参考文献】

- 国立歴史民俗資料館 1993 「日本出土の貿易陶磁」
- 大橋康二 1989 「肥前陶磁」 ニュー・サイエンス社
- 大橋康二 1990 「肥前磁器の変遷－技法と器形からみた－」『柴田コレクション展（I）』
- 稻原昭嘉 2000 「明石擂鉢の編年について」『第12回関西近世考古学研究会大会』
- 東森晋 2001 「第5章　まとめ」『石見焼関連遺跡調査報告1（飯田A遺跡・長東坊師窯跡）』島根県教育委員会
- 江戸遺跡研究会[編] 2001 「堺・明石擂鉢」『江戸考古学事典』柏書房
- 八峰興 2004 「山陰の中世土器に関する覚書」『中近世土器の基礎研究』XVIII　日本中世土器研究会
- 乗岡実 2005 「備前」『全国シンポジウム　中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』
- 愛知県 2007 「愛知県史 別編 窯業2 中世・近世 濑戸系」
- 木村孝一郎 2008 「越前焼の編年研究ノート」『吾々の考古学』和田晴吾先生還暦記念論集刊行会
- 乗岡実 2008 「江戸時代の遺跡出土の備前焼－瀬戸内地域を中心に－」、白谷朋世「備前焼灯明皿考」『江戸時代の暮らしと備前焼』備前市歴史民俗資料館紀要10
- 佐々木孝文 2009 「鳥取城「火除地」の変遷」『鳥取城調査研究年報』第2号　鳥取市教育委員会
- 佐伯昌俊 2010 「近世須佐焼に関する一考察」『山口考古』第30号
- 八峰興 2011 「絵図と発掘調査で読み解く山名氏の布施天神山城－理論からのアプローチ－」『鳥取地域史研究』第13号
- 財団法人 鳥取市文化財団 2011 「鳥取城跡（第20次調査）発掘調査報告書」

第4表 土器・陶磁器観察表（1）

遺物番号	報告番号	取上番号	遺構名 層位名	生産地	種別	形状文様	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	生産年代	備考
1	140	3608	SK-73	龍泉窯	青磁	劃花文	皿	—	—	—	13～14C	
2	143	2640	SD-27	龍泉窯	青磁	無文か	碗	※ 12.0	—	—	15～16C	
3	—	1624	II区	龍泉窯	青磁	蓮弁か	盤	※ 19.8	△ 2.1	—	13～14C	
4	152	3598	142深	景德鎮窯系	白磁	—	高台付皿	※ 10.4	△ 2.95	※ 5.0	16C 中葉	
5	151	3698	132深	景德鎮窯系	白磁	—	高台付皿	※ 12.0	△ 2.8	※ 6.6	16C 中葉	
6	153	3817	143深	景德鎮窯系	白磁	—	皿	※ 12.0	—	—	16C 中葉	
7	154	2455	SK-51	景德鎮窯系	白磁	—	皿か坏	※ 7.4	—	—	16C 中葉	
8	146	3495	131深	景德鎮窯	染付	—	皿	※ 9.8	—	—	16C 前半～中葉	
9	109	3273	153深	瀬戸・美濃	灰釉	—	皿	※ 10.9	2.5	6.5	16C 中葉	3283
10	107	3488	131深	瀬戸・美濃	灰釉	—	皿	※ 10.2	—	—	16C	
11	108	3787	SK-81	瀬戸・美濃	灰釉	—	皿	※ 11.4	—	—	16C 後半	
12	149	3531	P-148	中国	天目	—	碗	9.7	—	—	明代前半	
13	104	1788	SX-02	瀬戸・美濃	天目	—	碗	※ 11.9	6.4	4.4	16C	1789
14	—	3460	SK-69	中国福建省	白磁	—	皿	※ 12.4	3.1	※ 5.8	16C 後半	3463
15	110	3598	142深	景德鎮窯系か	青磁	—	皿	※ 12.1	—	—	16C 後半	
16	141	3817	143深	景德鎮窯	染付	—	皿	※ 12.0	—	—	16C	
17	142	3262	III区	景德鎮窯	染付	—	皿	※ 11.6	※ 6.7	※ 2.6	16C 後半～17C 初	3263
18	106	3697	132深	瀬戸・美濃	灰釉	折縁	皿	※ 11.2	—	—	16C 後半	大窯4
19	70	1654	IV区深	中国福建省	青磁	—	中型鉢	※ 24.0	—	—	16C 後半	1661ほか
20	—	2445	III区 A6G	備前	陶器	—	擂鉢	—	△ 5.2	—	16C	
21	161	3483	131深	在地	土師質	—	皿	—	—	※ 5.9	12～13C	3484
22	—	3446	SK-78	勝間田系	須恵器	—	甕	—	△ 7.6	—	13C	
23	162	3168	P-127	在地	瓦質	—	鍋	21.4	—	—	13C	
24	167	3258	153深	勝間田系	須恵器	—	底部	—	—	※ 12.8	13C	
25	158	3603	142深	在地	土師質	—	皿	7.9	2.1	4.8	13～14C	
26	160	3288	153深	在地	土師質	—	皿	—	—	※ 5.2	13～14C	
27	159	3669	144深	在地	土師質	—	皿	—	—	※ 7.4	14C か	
28	165	2456	SK-51	在地	瓦質	—	鍋	※ 22.2	—	—	14C	
29	164	3687	SK-79	在地	瓦質	—	鍋	※ 32.7	—	—	14C	
30	111	3339	154深	在地	土師質	—	皿	※ 7.1	1.6	4.3	15C 中葉～後半	
31	114	1159	SK-19	在地	土師質	—	皿	9.4	2.1	6.8	15C 後半	
32	163	3529	141深	在地	土師質	—	鍋	※ 28.1	—	—	15～16C	
33	166	966	SX-04	在地	瓦質	—	羽釜	※ 20.4	—	—	15～16C	
34	116	3237	153深	京都系	土師器	—	皿	9.4	2.3	4.5	16C 中葉～後半	
35	127	3469	132深	京都系	土師器	—	皿	10.5	2.45	4.0	16C 中葉～後半	
36	133	3661	SD-34	京都系	土師器	—	皿	※ 12.1	—	—	16C 中葉	
37	132	3843	143深	京都系	土師器	—	皿	※ 13.4	2.2	※ 6.8	16C 中葉～後半	

第4表 土器・陶磁器観察表（2）

遺物番号	報告番号	取上番号	遺構名層位名	生産地	種別	形状文様	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	生産年代	備考
38	131	3436	132 深	京都系	土師器	-	皿	※ 13.5	※ 2.0	-	16C 中葉～後半	
39	125	3433	SK-71	京都系	土師器	-	皿	8.8	1.95	3.8	16C 後葉	
40	126	3438	132 深	京都系	土師器	-	皿	8.8	1.85	-	16C 後葉	
41	124	3430	132 深	京都系	土師器	-	皿	8.75	1.85	4.5	16C 後葉	
42	129	3432	SK-71	京都系	土師器	-	皿	10.4	2.3	4.0	16C 後葉	
43	139	3598	142 深	京都系	土師器	-	皿	-	-	-	16C	墨書有
44	135	3465	SK-71	京都系	土師器	-	皿	14.0	2.15	7.0	16C 後葉	
45	134	3618	SK-69	京都系	土師器	-	皿	13.5	2.2	7.5	16C 後葉	
46	138	3450	SK-78	京都系	土師器	-	皿	※ 14.9	※ 2.15	-	16C 後葉	
47	136	3425	SK-71	京都系	土師器	-	皿	※ 16.0	-	-	16C 後葉	
48	137	3443	132 深	京都系	土師器	-	皿	※ 15.8	2.4	※ 9.5	16C 後葉	
49	82	1176	II 区	肥前	陶器	絵唐津	芙蓉手皿	※ 13.5	4.5	※ 5.0	1590 - 1610 年代	焼成不良
50	92	3424	SK-70	肥前	陶器	-	碗か皿	※ 11.25	-	-	16C 末～17C 初か	
51	-	959	II 区 A2G	備前	陶器	鶴頸	徳利	※ 3.9	△ 6.1	-	17C	
52	67	3698	132 深	備前	陶器	-	擂鉢	-	-	※ 12.7	16C 末か	
53	84	1149	II 区 A1G	肥前	陶器	絵唐津	皿	12.3	3.7	4.1	1600 - 1630 年代	見込砂目
54	83	3813	143 深	肥前	陶器	-	皿	※ 15.0	3.7	4.9	1600 - 1630 年代	
55	85	3099	141 深	肥前	陶器	碁笥底	皿	※ 11.0	※ 3.6	※ 2.8	1590 - 1610 年代	胎土目積
56	98	3556	142 深	肥前	陶器	-	皿	-	-	※ 4.5	1610 - 1630 年代	見込砂目
57	96	1151	II 区 A2G	肥前	陶器	-	皿	※ 12.1	3.65	4.8	1600 - 1630 年代	見込砂目
58	97	3103	141 深	肥前	陶器	-	皿	※ 15.9	3.1	5.8	1600 - 1630 年代	
59	86	3795	134 深	肥前	陶器	溝縁	皿	※ 12.0	-	-	1610 - 1630 年代	
60	88	3340	154 深	肥前	陶器	溝縁	皿	※ 12.5	-	-	17C 前半か	
61	90	3854	III 区深	肥前	陶器	溝縁	皿	※ 13.1	-	-	17C か	
62	93	3658	144 深	肥前	陶器	溝縁	皿	※ 13.3	-	-	1610 - 1630 年代	
63	91	3841	144 深	肥前	陶器	溝縁	皿	※ 13.0	-	-	17C か	
64	87	3798	132 深	肥前	陶器	溝縁	皿	※ 12.0	-	-	17C か	
65	89	3280	153 深	肥前	陶器	溝縁	皿	※ 15.0	-	-	17C か	
66	63	3336	154 深	備前系	陶器	-	擂鉢	※ 26.4	-	-	16 ~ 17C	
67	21	1763	SD-04	備前	陶器	-	甕	※ 55.0	-	-	16C	
68	99	1361	II 区 A1G	肥前	陶器	-	碗	※ 12.2	3.75	※ 4.8	17C 前半	
69	100	3801	P-193	肥前か福岡	陶器	-	碗	※ 9.5	-	-	17C 前半か	
70	94	3853	III 区深	肥前	陶器	蛇目釉剥	皿	※ 12.6	3.5	3.45	17C 第2～3四半	
71	95	1727	III 区深	肥前	陶器	蛇目釉剥	皿	13.5	3.1	4.1	17C 第2～3四半	
72	64	3774	143 深	備前	陶器	-	擂鉢	※ 26.8	-	-	16 ~ 17C	
73	65	2826	SD-28	堺	陶器	-	擂鉢	※ 36.2	-	-	17C 後半	
74	123	3463	SK-69	京都系	土師器	-	皿	※ 9.2	1.65	※ 4.4	16C 末	
75	130	3555	142 深	京都系	土師器	-	皿	※ 11.5	-	-	16C 末	
76	128	3421	SK-70	京都系	土師器	-	皿	※ 9.7	△ 1.9	※ 5.2	16C 末～17C 初	
77	122	3811	143 深	京都系	土師器	-	皿	※ 13.3	-	-	16C 末～17C 初	
78	144	2454	151 深	中国福建省	青磁	輪花	皿	※ 14.6	△ 4.5	※ 6.6	16C 後半～17C 初	
79	145	3658	144 深	中国	染付	-	皿	※ 9.3	-	-	16C か	
80	156	3165	152 深	漳州窯系	染付	-	皿か	-	-	※ 4.7	16C 末～17C 初	
81	157	3568	142 深	漳州窯系	染付	-	皿か	-	-	※ 4.5	16C 末～17C 初	
82	115	3807	153 深	手づくね	土師器	-	皿	9.3	2.7	3.5	17C 初頭	
83	117	3802	134 深	手づくね	土師器	-	皿	※ 11.6	-	-	17C 初頭	
84	121	3238	153 深	手づくね	土師器	-	皿	10.5	2.8	-	17C 前葉	
85	119	1356	II 区 A1G	手づくね	土師器	-	皿	10.7	2.7	-	17C 前葉	
86	120	1355	II 区 A1G	手づくね	土師器	-	皿	11.8	3.0	-	17C 前葉	
87	118	3632	144 深	手づくね	土師器	-	皿	7.9	2.3	5.0	17C 前半	
88	112	922	I 区深	在地	土師質	-	皿	8.6	※ 1.5	※ 6.7	17C 前半	
89	155	3658	144 深	漳州窯系	青磁	-	碗か	-	-	5.8	16C 末～17C 前半	
90	147	3495	131 深	漳州窯系	染付	-	皿	※ 10.2	-	-	16C 後半～17C 初	
91	148	3698	132 深	漳州窯系	染付	-	皿	※ 11.1	-	-	16C 末～17C 前半	
92	150	2663	SD-27	漳州窯系	染付	-	皿か	-	-	※ 4.6	16C 末～17C 前半	
93	81	2343	III 区深	肥前磁器	染付	-	皿	※ 14.3	※ 3.9	5.3	1610 - 1630 年代	蛇目釉剥→砂目積
94	79	1243	II 区 A1G	肥前磁器	染付	-	皿	※ 15.4	3.8	※ 5.3	1610 - 1630 年代	蛇目釉剥→砂目積
95	78	2699	P-100	肥前磁器	染付か	-	碗	-	-	4.2	1610 - 1630 年代	
96	113	3774	143 深	在地	土師質	-	皿	※ 10.3	2.2	6.5	17C 中葉	
97	74	2724	132 深	肥前磁器	染付	唐草文	碗	※ 12.2	-	-	1630 - 1640 年代	
98	57	3092	141 深	肥前磁器	染付	軟質	碗	※ 11.5	-	-	17C 後半か	
99	73	3236	153 深	肥前磁器	染付	-	碗	※ 12.1	-	-	17C か	
100	10	3051	155 深	肥前磁器	青磁	-	香炉	-	-	-	17C 後半～18C 初	
101	52	3305	154 深	肥前磁器	染付	-	瓶	-	-	4.5	17C 後半頃	

第5表 土器・陶磁器観察表（3）

遺物番号	報告番号	取上番号	遺構名層位名	生産地	種別	形状文様	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	生産年代	備考
102	12	3729	SD-37	波佐見	青磁	—	碗	※ 9.9	—	—	1630～1640年代	3734
103	27	1391	SX-07	肥前磁器	染付	捻花文	皿	※ 13.7	2.3	※ 8.9	1660～1680年代	
104	80	3232	153深	肥前磁器	染付	竹文	皿	※ 14.1	3.0	※ 6.7	1630～1640年代	
105	76	3420	132深	肥前磁器	染付	—	皿	—	—	※ 10.0	1630～1640年代	
106	75	3329	154深	肥前磁器	染付	大型	皿	—	—	※ 11.0	17C後半	3366
107	77	3774	143深	波佐見	青磁	三足付	盤	—	—	—	1630～1660年代	
108	56	950	Ⅱ区	肥前陶器	呉須絵	山水文	碗	—	—	5.2	1660～1690年代	
109	53	3228	153深	肥前陶器か	呉須平	無文	碗	※ 12.4	7.9	5.7	17C後半	3229ほか
110	54	3279	153深	肥前陶器	—	無文	碗か鉢	※ 10.7	7.0	6.0	17C後半か	
111	105	3370	154深	瀬戸・美濃陶器	天目	—	碗	※ 13.0	—	—	17C後半	
112	103	2725	Ⅲ区深	肥前陶器	刷毛目	—	皿	41.7	10.4	11.4	17C後半	
113	102	1302	Ⅲ区	肥前陶器	二彩手	—	皿	※ 44.9	—	—	17C	1567
114	31	1409	SX-07	肥前陶器	二彩手	—	皿	—	—	※ 11.7	17C中葉～末	
115	69	1357	Ⅱ区A1G	北部九州	施釉	—	鉢か	※ 30.0	—	—	17C	
116	59	2862	140深	内野山窯	青緑	蛇目釉剥	皿	—	—	※ 4.5	17C末～18C前半	
117	101	3648	P-163	肥前陶器	二彩手	—	皿	※ 27.0	—	—	17C後半～18C前半	
118	—	2813	瓦溜り①	須佐	陶器	鉄釉	擂鉢	—	—	—	17C末～18C前半	
119	68	2828	155深	須佐	陶器	鉄釉	擂鉢	—	—	※ 11.0	17C末～18C前半	
120	55	1458	Ⅲ区深	肥前陶器	刷毛目	—	碗	※ 9.8	7.3	4.3	18C後半	
121	—	818	Ⅲ区	瀬戸村	陶器	灰釉	碗	—	—	—	18～19C	
122	24	1304	SD-15	関西系	陶器	—	碗	9.1	6.1	3.05	18C	
123	17	1263	SD-04	関西系	陶器	—	碗	9.8	—	—	18C	
124	66	3793	SK-35	堺・明石	焼締	陶器	擂鉢	※ 37.0	—	—	18C後半	
125	71	3806	SK-54	越前	陶器	中型	甕	※ 45.4	—	—	18C末～19C前	
126	—	2169	IV区	瀬戸村	陶器	灰釉	水甕	—	—	—	18～19C	
127	72	45	SK-49	越前	陶器	中型	甕	42.8	51.7	17.5	18C末～19C前	
128	13	3645	P-160	備前か	陶器	灯明	皿	※ 11.0	—	—	18C	
129	29	1406	SX-07	石州・出雲か	陶器	緑灰色釉	碗	※ 9.6	7.2	※ 5.6	19C後半	1407ほか
130	—	2830	IV区	布志名	陶器	緑灰色釉	碗	—	—	—	19C	936
131	60	3397	IV区	越前	陶器	—	壺	※ 7.3	—	—	18C～19C	ねじたて技法
132	37	998	Ⅱ区A1G	肥前磁器	染付	—	碗	9.8	5.5	3.9	1690～1730年代	
133	40	1663	IV区D4・5G	肥前磁器	染付	網目文	碗	—	—	※ 4.8	1690～1740年代	
134	32	2769	153深	肥前磁器	染付	コンニャク印版	杯	※ 7.15	※ 5.18	3.5	1690～1730年代	火を受ける
135	47	1699	IV区D4・5G	肥前磁器	染付	型打成形	口禿皿	※ 15.4	4.2	9.6	1680～1730年代	火を受ける
136	50	1658	IV区D4・5G	肥前磁器	染付	—	皿	18.2	3.2	11.85	1670～1700年代	1659ほか
137	—	980	P-17	肥前磁器	染付	—	筆管	—	—	—	17C後半	
138	4	3506	SK-84	肥前磁器	染付	—	碗	※ 9.8	—	—	17C末～18C前半	
139	39	3708	133深	肥前磁器	染付	網目文	碗	※ 9.8	—	—	18C前半	
140	58	3119	144深	波佐見窯	染付	陶胎	碗	※ 9.65	—	—	18C前半	
141	35	3098	141深	肥前磁器	染付	—	杯	※ 6.8	—	—	18C前半か	
142	41	3855	Ⅲ区A6G	肥前磁器	染付	—	皿	※ 9.8	—	—	18C前半頃	
143	42	2052	Ⅲ区深	肥前磁器	染付	輪花	皿	12.2	—	—	18C前半頃	2054ほか
144	44	3673	SK-55	肥前磁器	染付	コンニャク印版	皿	—	—	※ 8.0	18C前半	
145	49	3735	SD-36	肥前磁器	染付	コンニャク印版	皿	—	—	※ 7.1	18C前半か	
146	1	2723	134深	肥前磁器	染付	—	碗	※ 8.5	5.7	3.4	18C後半頃	
147	36	1034	Ⅱ区A2G	肥前系磁器	染付	小丸	碗	8.2	4.6	3.3	1780～1810年代	
148	2	3760	143深	肥前系磁器	染付	小丸	碗	8.4	5.3	3.5	1780～1810年代	火を受ける
149	28	2295	SX-07	肥前磁器	染付	雲龍文	蓋	9.2	2.7	3.5	1780～1820年代	
150	7	824	P-33	肥前磁器	染付	草花文	蓋か碗	—	—	※ 5.0	18C後半	1023ほか
151	34	3643	SK-74	肥前磁器	染付	梅文か	碗	※ 7.9	—	—	17C後半～18C	
152	45	2791	SK-49	肥前磁器	染付	五弁花文	皿	—	—	※ 9.0	1740～1760年代	角福
153	43	3064	SK-67	肥前磁器	染付	花文	皿	※ 12.8	—	—	18C後半～19C初	
154	51	3735	SD-36	肥前磁器	青磁	—	火入か	—	—	※ 5.4	18C	
155	46	1151	Ⅱ区A2G	肥前磁器	染付	草花文	鉢	※ 14.0	5.6	※ 8.5	18C後半	
156	5	1030	Ⅱ区A1G	肥前系磁器	染付	広東	碗	※ 11.2	5.7	※ 6.3	1780～1840年代	見込島文
157	6	2171	IV区	肥前磁器か	染付	広東	碗	※ 11.3	6.25	※ 7.0	1780～1840年代	
158	23	1005	SD-15	肥前磁器	染付	筒形	碗	—	—	3.7	1780～1810年代	
159	9	3749	143深	肥前磁器	染付	蛸唐草文	蓋	※ 12.1	—	—	1800～1860年代	
160	48	3189	SD-27	肥前磁器	染付	—	皿	—	—	—	18～19Cか	
161	33	1483	SD-19	中国・清朝	染付	コバルト釉	碗	※ 9.2	4.8	3.5	18～19C前半	

凡例

報告番号は、鳥取城第20次における番号を指す。無いものは筆者が作成した。

報告番号を付す法量の数値は報告書から転記し、ほかは筆者が計測した。※は推定復元値、△は残存値を示す。

実測図の断面は須恵器が黒塗りで、瓦質土器、陶磁器はそのまま掲載した。